## ◆ 事業概要

#### 1. 概要

## 1)全体の概要

ア)県立都市公園の整備・管理では、県立都市公園の成立経緯と特性、これまでの取組みを踏まえ、環境問題、少子高齢化、大規模地震災害への対応などの社会状況の変化に対応するため、5つの視点から10の施策の方向性を定めている。個々の公園においては、各公園の立地や利用の状況に応じて、以下の施策を実施している。

Ⅰ 自然環境の保全と活用

(1)生態系や生物多様性の保全

(2)地球環境問題等への地域からの対応

Ⅱ 災害対応の推進

(3)緊迫する自然災害への対応

Ⅲ ユニバーサルデザインの推進

(4)誰もが安全・安心にすごせる公園づくり

Ⅳ 地域活性化への貢献

(5)歴史や文化の継承と創造

(6)地域と一体となった魅力の向上

V 効率的で効果的な公園整備とサービス

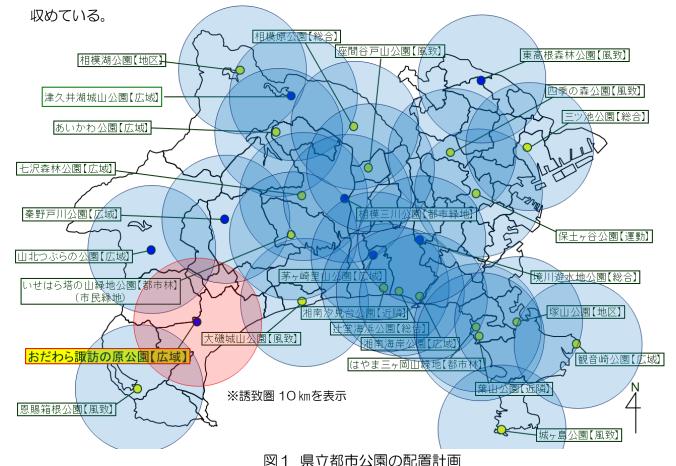
(7)質の高いサービスの提供

(8) 多様な主体との連携

(9)既存公園の再生

(10)都市の魅力を高める都市公園整備の着実な推進

イ)このような5つの視点を踏まえた上で、県全域での均衡配置を事業目標に都市公園整備を進めてきた。これまで 27 公園を開園し、多様なレクリエーションの提供や都市における緑の確保など一定の成果を



・誘致圏 10~15km を目安に均衡ある配置バランスを図る

• 開園 27 公園、開設面積約 698ha、計画決定面積約 1221ha(平成 31 年 4 月 1 日現在)

## 2) 評価対象事業の概要

- ア) 本公園は、神奈川県の南西部に位置する計画面積約 69.2ha の広域公園で、評価対象事業は、そのうち 第1期区域の 17.2ha である。
- イ)『ふるさとふれあい公園』をコンセプトとし、丹沢の山々を背景に足柄平野が一望できる「展望広場」、 収穫体験ができる「ふるさと果樹園」を有する丘陵地形、レクリエーションなど広々とした芝生の「多目 的広場」など、身近な里山の自然を活かした親しみのある公園として整備を行ってきた。
- ウ) 平成9年9月に都市計画決定され、平成18年3月に4.9ha を開園したのち、順次開園エリアを広げ、現在、開園面積は15.4ha となっている。



図2 評価対象事業位置図

#### 3) 評価対象事業の位置づけ

#### ア) 県の計画:

①かながわグランドデザイン 基本構想(平成24年3月)

第2期実施計画 主要施策・計画推進編2015-2018(平成27年7月)

政策分野別の体系: Ⅷ 県土・まちづくり

中柱①:次の世代に引き継げる持続可能な県土づくり

小柱④:自然環境に配慮したまちづくり、主要施策 707:都市公園などの整備

地域別の体系:県西地域圏

大柱②:地域資源を生かした観光振興と地域に根づいた産業の振興

小柱②:豊かな地域資源を生かした観光・産業の振興に位置づけられている。

②かながわ都市マスタープラン(平成19年10月改定)

第5章 部門別都市づくりの方針

- (3) 都市の個性や魅力を高める社会資本整備
- イ)都市の憩いやうるおいの場となる公園・緑地の体系的整備に位置づけられている。
- ③かながわ生物多様性計画(平成28年3月)

法令・制度等を通じた生態系の保全の中の一手法として位置づけられている。

④神奈川県広域緑地計画(平成8年12月)

広域公園配置の考え方と基本方針のもとに計画した広域公園の1つである。

## イ) 市の計画

①小田原市緑の基本計画おだわらみどりの創世プラン(平成28年3月)

まちを取り巻くみどりの拠点育成として、整備事業の促進を図る。

# 2. 事業の経緯や必要性

## 1)経緯

•	<b>-</b> 47					
	平成 9年 9月	都市計画決定(面積 69.2ha、種別 広域公園)				
	平成 11 年 1月	事業認可、用地取得開始				
	平成 18年 3月	一部開園(面積 4.9ha)				
	平成21年 4月	開園区域の拡大(累計 6.9ha)				
	平成 24年 1月	開園区域の拡大(累計 9.9ha)				
	平成 24 年 9月	開園区域の拡大(累計 12.7ha)				
	平成 25 年 4月	開園区域の拡大(累計 13.9ha)				
	平成 26 年 4月	開園区域の拡大(累計 14.9ha)				
	平成 27年 4月	開園区域の拡大(累計 15.4ha)				

#### 2) 必要性

- ア)県西地域において、広域公園の空白地域を埋める県立都市公園として計画、整備され、広域レクリエーション需要を満たしており、多くの人々に利用されている。
- イ)県が推進する県西地域活性化プロジェクトにおいて、未病いやしの里「運動の駅」として登録され、未病 改善を気軽に実践できるラジオ体操や、各種運動イベントを実施しており、地域住民の健康増進に役立っ ている。
- ウ) 4月の「春の公園まつり」や、7月の「七タイベント」、10月の「秋の公園まつり」など、季節に応じて、生活文化を感じることのできる多くのイベントが開催され、地域活性化に貢献している。
- 工)小田原市地域防災計画において、広域避難所2次施設および風水害避難場所に指定されており、地域の 防災拠点として重要な役割を担っている。
- オ) 年間利用者については、増加の傾向を示している。

#### 3. 事業の目的

レクリエーション需要の増大に対応するための、広域的なレクリエーション活動の拠点として、『ふるさとふれあい公園』をコンセプトに、身近な里山の自然や生活文化等の地域特有の資源をできるだけ活用し、環境共生や防災機能にも配慮した公園を整備するものである。

#### 4. 事業の内容

1)公園種別:広域公園

2) 事業箇所:小田原市 久野地内

3)計画面積:69.2ha

4) 事業面積:17.2ha(第1期区域)

5) 主要施設:パークセンター、展望広場、大型遊具、多目的広場、スロープデッキ、ローラーすべり台、 陽だまりの丘、見晴しの丘、ふるさと果樹園、駐車場等

## 5. 事業実施にあたり配慮した項目

### 1)幅広い意見の反映

・計画を策定する過程で、学識経験者等からなる検討委員会を設置し、県西地域における県立都市公園の 候補地選定や評価を行い、公園の位置づけや目指すべき方向について、意見を伺いながら事業を進めた。

## 2)整備に関する配慮

- ・太陽光発電システムや屋上緑化、雨水活用システムなど、環境共生型のパークセンターとして環境にやさしいシステムを取り入れることで、環境負荷の低減に努めた。(写真 1)
- ・身近な里山の自然を活かすため、ミカン畑など当時からある果樹園をそのまま有効活用し、その地域の 従来の景観を保全することで、ふるさとを感じられる公園とした。
- ・眺望を楽しみながら遊べる施設として、全長 169mのローラーすべり台を丘陵地の斜面に配置し、地形の改変を極力抑えた整備により、自然環境の保全を図った。(写真2)









写真1 パークセンターの太陽光発電システム

写真2 ローラーすべり台

## **◆** チェックリスト

## (1) 事業の必要性等に関する視点

### ①事業を巡る社会経済状況

#### ア) 地域の状況

・本公園前に伊豆箱根バスの「県立諏訪の原公園」停留所が平成27年4月に新設され、小田原駅から約30分でアクセス可能となり、今後も更なる利用者の増加が期待される。

### イ)地元の意識

- ・地元の住民や養護学校の生徒によるミカン畑や花壇の世話、障害者支援施設による清掃や除草活動など、ボランティア活動の場を通じて、地元の公園に関する意識が高まっている。
- ・小田原市観光課の「ウォーキングタウンおだわら散策マップ」に、コース内の主な観光スポットとして本公園が紹介されており、小田原市の観光振興に必要な公園と認識されている。

## ウ)公園利用者数の推移

・里山の自然を活かした親しみある公園の特徴や、指定管理者による多様なイベント開催、及びインターネットを用いた広報活動等により、利用者数は開園区域拡大とともに増加し、現在15万人強で推移している。

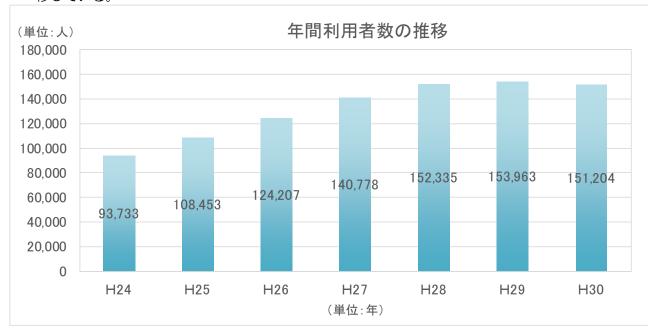


図4 年間利用者数の推移

## ②事業の投資効果等

■費用対効果

 総費用 C= 165億円
 用 地 費: 76億円

 施 設 費: 62億円

総便益 B= 1,183億円 直接利用価値: 43億F

間接利用価値: 1,140億円 費用便益比 B/C=総便益/総費用=1,183億円/165億円 ≒ 7.1

経済的内部収益率(EIRR) 25.4%

## ■費用対効果(参考)

費用便益比 B/C=総便益/総費用=267億円/165億円 ≒ 1.6 ※間接利用価値において、現在の利用状況を鑑み、世帯数や防災拠点機能について一部補正を加えた値

### ■総合的な効果

### ア) ふるさとの自然環境の保全と環境教育

- ・眺望の優れた展望広場をはじめ、身近な里山を活かしたミカン畑や竹林など、地域の自然を活かした 親しみのある公園づくりにより、ふるさとの自然環境を保全している。
- ・果樹園での収穫体験や、木の実や枝を使ったクラフト製作など、公園内の資源を利用した体験イベントを通じて、自然とふれあう遊びを経験することができ、子どもの環境教育に役立っている。

#### イ) 地域活性化への貢献

・地元の中学校の吹奏楽部による演奏会が開催されることや、地域のボランティア活動が行われるなど、 住民が活躍できる地域の交流拠点となっており、地域活性化に繋がっている。

#### ウ) バリアフリー対応

• 高低差のある地形において、スロープデッキを整備するなど、園路のバリアフリー化により、車椅子 やベビーカーでも園内を周回でき、幅広い層の利用者が安全で快適に公園を利用できる。



写直3 展望広場からの眺望



写真5 クラフト製作



写真7 ボランティア活動



写真4 ミカン畑の収穫



写真6 中学校の演奏会



写真8 スロープデッキ

## ③関係する地方公共団体等の意見

### ■小田原市

緑と文化の軸を形成する公園・緑地として、地域の自然環境を活かした里山をイメージした本公園の整備 促進を望んでいる。

また、地域防災計画において、広域避難所2次施設や風水害避難場所として位置付けられており、防災施 設として活用している。

## ■地元自治会

地元自治会としては、多くのイベントを通じて地域間の交流が図られるよう、コミュニティーの場として 利用されることに期待を寄せている。

## (2) 事業の進捗の見込みの視点

# ①事業の進捗状況(1期事業区域)

■事業化年度 : 平成 9年度

■用地着手年度:平成10年度 ■工事着手年度:平成10年度 ■進捗率:99%(事業費ベース) ■用地取得率 :99% ■供用率:90%(開設面積15.4ha/計画面積17.2ha)

■残事業の内容等:園路整備および法面整備

## ②これまでの課題に対する取り組み状況

地域の防災や健康志向などのニーズに対応できるよう、里山の自然を活かしつつ、利用者や地元の意見 を取り入れながら施設の整備を行ってきた。

## ③今後のスケジュール

平成30年度末時点での事業進捗率は99%となっている。今後も地権者との交渉を継続し、未買収用 地の確保及び整備を進める。

表1 今後のスケジュール

	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度	
用地買収					
工 事					

#### (3) コスト縮減や代替案立案等の可能性の視点

## ■コスト縮減の可能性

地形の改変を極力抑え、現況の地形等を活かした公園整備とすることで、イニシャルコストの低減を図 るとともに、ボランティア団体等との連携による維持管理・運営を進めることで、引き続きコスト縮減を 図る。

#### ■代替案立案等の可能性

本公園は、県西地域において、広域公園の空白区域を埋める県立都市公園として整備され、毎年 15 万 人の来園者に利用されている。整備も終盤まで進み概成に至っており、代替案立案は必要ない。



写真9 ラジオ体操



写真10 多目的広場



写真11 タケノコの収穫体験



写真12 キウイの収穫体験



写真13 光と風の体験遊具



写真14 未開園区域

# ◆ 対応方針案

#### 【理由】

本事業は、里山の自然や生活文化、足柄平野を望む眺望等の地域特有の資源を最大 継続 | 限活用した公園の整備を目指しており、地元からの事業に対する期待度も高い。事業 進捗率は99%であり、事業の必要性に変化はなく重要性は依然として高いことか ら、事業を継続する必要があると判断する。